



號四第卷第八第

香
さ

話の種子

文
學
士
高
師
教
授

下田次郎

子供に好きなる事多し。取りわけ食べること、遊ぶことが最も好きなり。されど、これにもをさへ劣らざる好きなることあり、話を聞くこと、則ちこれなり。話はこれに聞き入るときは、子供は食べることも忘るゝほど的好物なり。腹が減れば、食物を求むるが如く、心に何か欲しきときは、「お母さん何ぞお話を」とは、屢々子供より聞く言葉なり。腹の満足と共に、心の満足は與へざるべからず。然るに世の母には、子を育てるとして、食物の選擇分量與へ方等につきては、一方ならぬ骨を折るに、子に聞かしむる話については、呆るゝほど平氣なる者少なからざること訝かしけれ。口より入れる身體の食物が大切なば、耳より入れる心の養を食物もまた大切にあらずや。身體にのみ結構なる滋物を取らせて、心には、出鱈目の龜末千萬なる材料を

與へて、それで子を育てるといはるべきか。飯、肴、卵、牛乳等の常食は勿論、煎餅、筋菓子より、むつかしき名の西洋菓子まで日頃蓄へふきて、間食にも不自由をさせぬほどの母親が、子には話をせがまれば、用意皆無のことにて、素より話の出来ればこそ、よい加減の胡麻かしをいふて、心の滋養を取らしむべき折角の機會を殺して仕舞ふこそ、殘念なれ。母の有つべきものは、着物にあらず、肩掛けにあらず、子に聞かすべき話の種なり。

されど唯君の種と有ち居ることが結構とのみは云へず。話も品に依るものにて、下らぬ話ならば、腐るほど有ら居たりとて、却て有害にて、いつも話のなき方が好きなり。話すほどならば子供の爲になる良き話をせざるべからず。近來昔話ふ伽譚を始め、話の種本は澤山出來て、雜誌店繪草紙屋の店も賑はどなるが、何分にも平凡なる人間の龜未なる頭にて、一夜作りの出鱈目の作が多く、こんな話を謹聽せしめて、子供の清淨無垢なる大切の頭を汚すは、勿體なく情けなく思はるなり。

語せば、今少し氣の利きたる意味ある話をせざるべからず。凡そ國には言ひ傳へ聞き傳へたる話といふものあり。桃太郎、吾切雀、猿蟹合戦、花咲爺、竹取物語、浦島太郎の如きふ伽譚、昔譚は、我が國傳來の話にて、先祖代々親は子に、子は孫に、恰も一家の身代を譲るが如く、日本國民無形の身代として代々に譲り傳へたるものにして、むづかしく言はゞ親たるものゝ心得、語り聞かすべき義務ある話といふも、大言にあらず。古事記は我國最古の書にして、我が國神代及び上古の事を記し、伯耆の白鬼、八岐の大蛇退治、天の岩戸等、子供の喜んで聞く話多く、我等が祖先の氣象、抱負、経綸、建國の由來等を伺ふに足るべき話に満てるものなり。これらの話は、國民の承知しくべきものにして、親の子に聞かすべき話なり。又我國は歴史古く、國民の誇りとすべく忠孝を始め、その他あらゆる美德の發現せる歴史上の代表的美談佳話に富む。此等のものは、代々話し聞かされたるのみならず、祭祀の本尊となり、芝居、活人形、

見世物、掛けランタン、提灯、幟旗等の題目となりて、知らずの間に、その感化を受け。日本人たるの精神氣象を養ひたりたるものなり。今日までの日本人は、これらの傳説歴史の中に煦育せられ、そのうちに本統の日本人となりたるものにして、今後我等の子供に聞かしめんとする話は、斯くの如きの日本人も亦固より然らざるべからず。わが子供に聞かしめんとする話を、斯くの如きのものをいふにて、俄か作り間に合せの龜千萬なる話にはあらざるなり。小説の如きも、近作物ばかり讀まず、作中の人物が代々の國民の感動を與へたるが如き古きものをも読みふくべし。古の教育は、教科書不完全なりし代りには、家庭にて斯る話ををして聞かせて、子供に國民傳來の思想感情を行き渡りて、子供は色々の事を心得居る代りに、肝腎の國民の精神を養ふべし。傳來の話をば心得居らざるが如し、これは教育上の一欠點なれば、学校教育を補ふ積りにて、家庭に於て、常に斯る話ををして聞かすべし。而してそれは誰れがするかといふと、誰にもあらず親、殊に母親其人なり。

母の添乳に聞かされたる話が、十數年の學校教育にも勝りて、人を動かすことありと知らずや。